坂口安吾「狂人遺書」論

岸本梨沙

はじめに

「狂人遺書」は『中央公論』の一九五五（昭和三〇）年一月号に掲載され、その後、遺作集『狂人遺書』（中央公論社、一九五五年三月）に初めて収録された。安吾の作品群の中でも歴史小説に分類される作品であり、豊臣秀吉を語り手とした一人称小説である。

その安吾の歴史小説に対して檀一雄は「解説」（『坂口安吾選集』第六巻　創元社、一九五六年七月）で次のように述べる。

安吾は歴史を叙述しようなどと思っていやしない。単刀直入、信長、秀吉、家康の内フトコロに飛び入って、己をたしかめ、己にうなずくだけのことである。

だから、安吾の歴史小説は、例外なしに、精神の形成と、拡大の物語だ。

同時代評[1]も影響しているだろうが、『国文学解釈と鑑賞別冊　坂口安吾事典〔作品編〕』（至文堂、二〇〇一年九月）の「狂人遺書」の項では壇と理解を同じくする解説がされている。

昭和三十年二月十七日の突然の死から逆算すると、「狂人遺書」は、事実上の安吾自身の遺書と言える。自身を「狂人」と自覚する秀吉、泣いてばかりいる秀吉。そこに、最晩年の安吾の姿がなにほどか投影されていよう。[2]

以上のような見方と同じく、「狂人遺書」に関する先行研究には、安吾と秀吉を重ね合わせ考えるものが多い。その中では、秀吉晩年に生まれた秀頼を安吾の晩年に生まれた一人息子に重ねたり、[3]朝鮮征伐と太平洋戦争を重ね合わせそこに安吾の太平洋戦争への解釈が描かれていると考えられたりしている。[4]また、このような先行研究以外には語りの問題にも着目がされている。『国文学解釈と鑑賞別冊　坂口安吾事典〔事項編〕』（至文堂、二〇〇一年九月）の「狂人遺書」の項で高和政は「書く現在における秀吉の自己分析のありようも含めて、「書く―書かれる」の関係性に敏感になる必要がある」と述べている。また原卓史は『別冊文藝　坂口安吾』（河出書房新社、二〇一三年九月）において「一人称による〈狂気〉の創造が見事。」と述べている。

本論では、安吾と秀吉を重ねることは基本的にはせず、高和政や原卓史が指摘する語りの問題を出発点とし、本作における語り手で

ある「オレ」＝秀吉がどのように語られ、その結果としてどのような造形がされているかを改めて考察していきたい。さらに、本作冒頭で語り手である「オレ」は次のように語る。

オレにはオレのことが何より分らなくなってしまった。だがただ一ツ、何よりも分りすぎて苦しんでいることがある。この一ツのために疲れきってしまったのかも知れぬ。(…) そこでそれを書きのこしてオレがミセシメになる日の恥をいまわの恃みにしたいと思う気持になった。

遺書を書く動機、目的が「ただ一ツ、何よりも分りすぎて苦しんでいること」を曝すためであるということが引用部から読み取れる。そこで、「オレ」＝秀吉がどのような造形がされているかを踏まえ、この冒頭で秀吉自身が語る「一ツ、何よりも分かりすぎて苦しんでいること」が何であるかをも明らかにしたい。そして、最終的には本作のタイトルが「狂人遺書」とつけられたのはなぜかを考えたい。

一　キャラクター設定

典拠とその比較に関して表立って論じることはしないが、以下、安吾による言及[5]もある徳富猪一郎『近世日本国民史』や山路愛山『豊太閤』なども参照しながら論を進めていきたい[6]。

では、本作における秀吉がどのように語られているかを、本文を引用しながらまとめていく。

水を得た魚という言葉がある。オレが信長公に仕えて後はずッとそういう感じで進退に不自由を覚えることがなかったものだ。だが近年はまるで水のない魚だ。

この引用から秀吉には「水を得た魚」＝全盛期と「水のない魚」＝衰退期があるということがわかる。衰退が始まるのがいつからかということは様々な見解があろうが、少なくとも秀吉の内面に変化が訪れるのは鶴松の死後、有馬温泉での療養である[7]。

では全盛期から衰退期へ、秀吉のキャラクターはどのように変化していくのか。まずは全盛期、「水を得た魚」状態の秀吉について考えていきたい。少し長いが、次に引用をする。

オレは堺の街の繁栄をオレの領地、日本全体のものにしたいと思った。日本全土を平定の後はそれがオレの仕事で、さすがは秀吉よ太閤よ天下者よとうたいはやされたいと思った。

オレは唐が話のほかの大国であることを知っていた。(…) その歴史をオレだけがくつがえしてみることができれば小気味よいに相違ないが、オレはそのような無理が通らぬことは百も承知であった。

オレの気持が次第に海外へ出兵しなければならない非常の場合を想定しがちになっていたからで、オレの名にかけて過去の歴史をくつがえしたい、対等の貿易へ持ってゆきたい、オレならば、そしてオレの武力ならばそれができる、というようにオレの夢想が発展していたからであったに相違ない。しかし夢想が発展すれば、それに対する反発が不安となって生じるのは当然

で、まして夢想に根拠がなければ尚更のこと、オレはオレのこの夢想を実は敵のように怖れていた。

以上のように、「水を得た魚」状態の秀吉は「うたいはやされたい」、「過去の歴史をくつがえしたい、対等の貿易へ持ってゆきたい」という願望を口にする。しかし、このような願望を持つ反面、「そのような無理が通らぬ」ことをも自覚しており、自分が口に出したことが現実味を帯びてくると不安を感じる。人前では大きなことを言い、理想も夢も大きく持つ。しかし、現実が正確に見えてしまっているために不安を感じる。そんな秀吉の二面性がここからうかがえよう。

では、現実が正確に把握できているのならばなぜ無理な願望を口にするのか。あるいは嘘だったはずのそれらになぜ現実味が出てきてしまうのか。それは偏に、その時の秀吉の状態が原因だと考えられる。

こうして大明征伐を酔余の大言壮語としているうちに、事の次第によっては海外へ兵をうごかしてもようではないかというような気持が日に日に安易に形づくられてしまっていた。

オレはその晩、群臣を前にこの上もなくよい気持に酒に酔った。あげくに、

「次の征伐は大明国ときまったぞ。一同その用意をいたしておけ。路銀のないものにはオレが用立ててやる。それ持って行け」

と景気よく三百枚の黄金をバラまいたりした。（…）まさか、それ〔海外征伐―引用者註〕が事実になろうとはオレが信じていなかったはずだ。

酒宴がはじまると、もうダメだ。例の気分がニョロニョロと大鎌首をもたげる始末になって、（…）

このように秀吉が現実には実現することのない「大言壮語」を言う場面には、ほぼ〝酔〟という現象が関わってくる。また大明征伐や対等の貿易に関して、実現が不可能だと思っているそれらを「ウヌボレと空想」だと断ずる場面があるが[8]、「ウヌボレ」は〝自惚れ〟すなわち自分自身に惚れる行為だ。これもまた自分自身に酔うという〝酔〟の形であろう。そして「ウヌボレ」ているからこそ大明征服という「大言壮語」を言い放つ。つまり〝酔〟が秀吉の「大言壮語」の引き金になっているのだ。

そして、〝酔〟は「大言壮語」の引き金になるだけではない。秀吉の中での「大言壮語」と現実の境界を曖昧にしてしまう役割をも担っていると考えられる。秀吉にとって大明征服や朝鮮征伐は到底叶うことのない「大言壮語」であり、空想であり、現実味など一切ないものであった。しかし、それを「大言壮語」として口にしていく内に、徐々にそれらが現実味を帯びてくる。先に引用した「オレの気持が次第に海外へ出兵しなければならない非常の場合を想定しがちになっていた」という語りがそれを物語っていよう。

では、なぜ「非常の場合を想定しがち」になるのか。それは、秀

吉が他者からどう見られるかということを異様に気にする性格が災いしていよう。例えば、無理とわかっていながら小西に対し「日本が明の属国とあってはオレの顔もたつまいの」と問いかけるが、実現性は棚に上げ、「オレの顔」＝他者からの自身の評価を気にしていることがここからはうかがえる。

むろん小西が群臣の前ではオレの顔を立ててくれることを承知の上でのオレの言葉であったが、だまされたのは群臣ではなくてむしろオレ自身であったかも知れない。オレはオレ自身がつくりだしたニセの現実にだまされて実は誰よりも酔っていた。

ここからは、群臣＝他者の前では良い恰好を見せ、格好の悪いところを一切見せたくはないという秀吉の人物像がうかがえる。そして、このような他者の目に晒される自己を現実にしようとする秀吉の性格こそが、秀吉をして「非常の場合を想定しがち」にさせているのだろう。そして、この時に起こっているのはやはり〝酔〟の現象だ。他者を騙すために口から放たれた「大言壮語」＝「ニセの現実」を自身の性格ゆえに撤回したくとも出来ず、口に出し続ける内に、自身が構築した「ニセの現実」に自分で〝酔〟ってしまう。このようにして〝酔〟は秀吉の空想と現実の境界を急速に曖昧にしていく。

しかし〝酔〟は有馬温泉での療養を最後にぱったりと姿を消す。一子鶴松の死後、秀吉は有馬温泉に療養に向かう。そこで酒に酔い、「すべての音が人語にきこえ」たり、空耳であることを知っていながら「日本中の人々がそれと同じことを云っているに相違ない」と確信したりする。現実と空想の類との区別を〝酔〟が曖昧にしている。だが、これ以後――つまり「水のない魚」状態の秀吉が酔う場面は登場しない。これは有馬温泉療養後、秀吉の現実と空想が一致してしまったことが原因ではないだろうか。つまり「ニセの現実」であったはずの朝鮮征伐が現実へと変貌してしまったことにより、「ニセの現実」にだまされ続けている＝酔い続けている状態が秀吉の内部で継続していると考えられよう。

以上で秀吉のキャラクターについて述べてきたが、はたしてそれは安吾独自のものなのだろうか。ここで一度典拠について簡単に触れておきたい。

例えば『近世日本国民史』では秀吉について、「彼が成功の惰力は、彼をしてなんとなく浮き足たらしめた」や、「八箇年に日本を統一し、天下の事は、何を為しても、殆んど意の如くならざるはなきを見て、当人自から頗る乗気」、「成功中毒者になった」などと述べられている。このように、同書における朝鮮征伐前後の秀吉は本作の秀吉同様に自身の成功と栄光に酔っている、という描かれ方がされている。しかし、同書では、本作の秀吉のように成功と栄光に酔いつつも、その成功と栄光がもたらす輝きの裏に不安を感じ、同時に現実の有様をしっかりと見つめている様は描かれない。また、本作後半の「水のない魚」状態の秀吉が、自身の朝鮮征伐に関わる事柄を「見栄と虚勢」で総括するが、その総括も同書では描かれてはいない。

『近世日本国民史』では浮足たち放慢[9]だった秀吉が、本作では浮

足たち放慢でもあるが、その向こうに現実という暗い影を常に見続けている。だが他者の目を気にする余り、その現実が現実ではないことを認めることが出来ずに〝酔〟っぱらい、最後には見栄や虚勢を張るにいたる。そんなキャラクターとして秀吉は描かれている。

要するに、「水を得た魚」＝全盛期の秀吉は『近世日本国民史』から得たであろう「成功中毒者」という側面を、〝酔〟により「大言壮語」、空想、「ニセの現実」を口にさせることで表現している。しかしその一方で、それらが現実にならないことを自覚させ続けるという設定を加えることで、同書の示す秀吉像とは差異のある秀吉を描いている。このようにある程度の区別のついていた全盛期に対し、「水のない魚」＝衰退期の秀吉は常に自分の構築した「ニセの現実」に〝酔〟っぱらい続け、自身の空想に現実を浸食されてしまっている、そんな人物として描かれる。

このように考えていくと、本作の秀吉は現実と空想の全く相容れないはずのものを同時に内包していることになろう。そして本作の秀吉の場合、現実と空想以外にも対立する二つのものを抱え込んでいることが本文からうかがえる。

二　二項対立

〝二項対立〟――存在する二つの概念が、矛盾あるいは対立の関係にあること。現実と空想はまさにこの関係にあろう。そして一人称小説である本作の語り手であろう秀吉は、他の登場人物に対しても相対する認識を同時に有していることが読み取れる。

例えば小西行長。秀吉は彼に対して次のような認識を有している。

小西は律儀で着実な男であるが、神信心の一ツもしようという心ガケの男だけに、主に対して従順すぎるところがあった。忠実にすぎるところがあった。

この結果、小西ははじめから対等な貿易など不可能と知りながら、有利な名目で貿易ができるよう努力すると無理な約束を結んでしまう。知らないならまだしも、知っているのならば頼りにするにはいささか問題のある部下である。それは秀吉とて重々承知していたであろう。

しかし夢想が発展すれば、それに対する反発が不安となって生じるのは当然で、まして夢想に根拠がなければ尚更のこと、オレはオレのこの夢想を実は敵のように怖れていた。とにかく小西がよろしきようにしてくれるだろうと、それをタノミにしていたのだ。

秀吉は自身の夢想＝「ニセの現実」、空想を怖れるが、小西がそれをどうにかしてくれるだろうと「タノミ」にする。しかし、自身に忠実過ぎるところがある部下が、本当に秀吉の空想を止めることができるのだろうか。むしろこの役割は石田三成に期待すべき役割ではないか。まして、小西の性格を秀吉が把握しているのならば。秀吉は小西に対して一方ではタノミにしながら、一方ではタノミにならないと感じるという、相対する認識を有していることがうかがえる。

また、江戸大納言に対しても同様に相対する認識を秀吉は抱いて

いる。

あの男は不思議な人だ。離れておれば敵であるが、会えばこの人ほど友と思われる人はない。律儀である。忠実である。そのたのもしさがヒシヒシと感じれる人だ。

秀吉は、江戸大納言と離れている時は「ひどい目にあわせてやる」、敵だ、と言い、江戸大納言と会った時には律儀で忠実で、「末代までの盟友にすべきだ」と言う。江戸大納言に対する正反対の認識――敵である江戸大納言と友である江戸大納言――を秀吉は同時に有してしまっている。

あるいは、認識というにはズレが生じるかもしれないが、秀次についても言及をしておきたい。秀吉にとって秀次は秀頼が生まれる前も後も「好きな方ではな」い人物であり、秀頼の誕生後はその思いがさらに加速する。また、「石」や「風」という形で秀吉の心中をかき乱すほどの人物でもあった。しかし秀吉が徹頭徹尾、秀次を嫌っているかといえばそうではない。

「殺してやるぞ。八ツ裂きにしてやるぞ！」

と叫ぶ。けれどもようやくそれを抑えることができると、奴の本心は素直でオレに甘えたくて祈るような心をもっているはずだと考え、オレはどッと涙を流したまりかねてタタミに顔をふせてしまうのが例であった。

一方では秀次のことを殺すほど憎みながら、一方では「オレに甘えた」い心の持ち主だ、と涙を流す。これも秀吉の中に秀頼の関白位を邪魔する秀次と、自分を慕う秀次の二人が認識されている結果ではないだろうか。[10]

以上のように、秀吉の内面に二面性――現実と空想、不安と「大言壮語」――が垣間見えるとともに、秀吉が有する登場人物たちへの認識にも二面性が垣間見えてくる。この登場人物たちへの認識にみえる二面性は、秀吉の内面の二面性に起因しよう。秀吉自身が内面に相対するものを抱えているということは、秀吉自身のものを見る視点、観点が二つあることを示しているとも考えられる。自身の口走る「大言壮語」を一方では空想だと断じながら、一方ではまるで現実であるかのように感じるように。それと同様に、秀吉が見る小西や江戸大納言、秀次は、秀吉により二つの方向から解釈され、語られる。本作におけるキャラクター達の認識には、二面性がつきまとっている。

しかし、ここで一つの疑問が生まれる。今までに述べてきた秀吉のキャラクターしかり、登場人物の認識しかり、何か特別な意味をそこに見出せるものであっただろうか。酒でなくとも何かに酔っぱらってしてしまう空想や妄想、「大言壮語」に対し、ふと我に返って現実はそんなに甘くはないと気づき不安になることは当然あろう。あるいは、本当は見なくてはならないが、不安や恐怖に押しつぶされそうで見て見ぬふりをすることもあろう。一人の人間に対する認識が一つしかないことがあるだろうか。この人のこの部分は好き、けれどこの部分は嫌い。それは普通にあってしかるべき認識ではないか。つまり、やることなすことはその地位ゆえに派手で大規模ではあるが、本作における秀吉はごく普通の人間と読むこともできる

のではないだろうか。だが、もしそうだとするならば、そのことにより本作はどのような解釈が可能になるのか。

そこで、本作における〝狂人〟とはどのようなもので、冒頭で秀吉が語る「ただ一ツ」とは何かを考察することで、どのような解釈が可能になるかを探っていきたい。

三　「ただ一ツ」

本作のタイトルについて原卓史は「作品のタイトルは「狂人遺書」とされている。まさしく「狂人」が書いた「遺書」なのである」[11]と述べる。そしてそのタイトルが示すように、作品冒頭では次のように語られる。

朝鮮へ兵を送る前後から、巷ではオレを狂人と噂していることも知っている。子が死んだので発狂して出兵したと大名どもまで心に思うていることも察している。それも事実かも知れぬ。オレにはオレのことが何より分らなくなってしまった。

秀吉に対する「狂人」という認識を、作中における「巷」や「大名」が有していることがうかがえる。それに対して、遺書執筆時の秀吉自身は「オレにはオレのことが何より分らなくなってしまった」と語るように、自分自身に対して、噂や「察している」レベルの認識しかできていない。よって自分自身が「狂人」かどうかは判別できないでいる。そうであるからこそ、というべきか、「巷」や「大名」という他者から与えられる認識を「事実かもしれぬ」と、そのまま受け入れようとしてしまう。だが、この自分自身に対する混乱した認識は秀吉の死の間際に発揮されるものであり、それ以外の部分では見られない。全盛期では自身の空想と現実を見極め、衰退期でも自身の空想へ向かって邁進する。双方ともに「オレのことが何より分らな」いという態度とは受け取れない。死の間際に見られる混乱した認識はどこから発生しているものなのか。このことを考えるためにも、ここで本作における〝狂人〟がどのようなものか考えたい。

安吾のエッセイには〝狂人〟について、「だいたいにおいて一代にして名をなした独裁者のような偉大な成り上り者は概ね天才的な人物であるから狂人と紙一重の危険人物と考えてよろしいかと思う」[12]という言葉がある。また、同エッセイで安吾は日本の狂気として秀吉の朝鮮征伐を挙げている。つまり、安吾にとって狂人と天才は表裏一体、表面に見えてくるものは相対するものであっても、それを同一人物が同時に有することができると考えてきたことがうかがえる。

このことを踏まえて考えると、秀吉が求めた〝太閤〟にふさわしい偉業と、他者からの〝狂人〟という評価は皮肉なことに一致していることになりはしないだろうか。そして、そうであるならば、本作の秀吉はある意味では〝天才＝狂人〟になりたがっていたと言うことはできないだろうか。秀吉は先に指摘したように、他者からの目を気にする人物として設定されている。その時に、秀吉が気にしていたのは〝太閤〟として、つまり安吾のいう「偉大な成り上がり者」として世間にもてはやされたい、あるいは誰にも成し得ないこ

とを成し得たいということであった。その願望の果てにあり、本作でクローズアップされたのが朝鮮征伐であり、大明遠征であった。確かにこれが成功しさえすれば秀吉は他者から〝狂人〟などとは言われず、〝天才〟ともてはやされていたことだろう。結果として朝鮮征伐は常人には理解し難い行いとなってしまった上に、多くの兵を失い、人民の生活を逼迫させるものとなった。そして、そのことにより秀吉は他者から〝狂人〟であると見なされる。だが、〝天才＝狂人〟であるという前提に立つと、秀吉は皮肉にも、そうなろうとしてそうなった、ということになる。

とはいえ、本作における秀吉が常に〝天才＝狂人〟になろうと思い続けていたわけではない。全盛期の秀吉は〝天才＝狂人〟となろうとする自己を、不安に思い、自分が口に出す「大言壮語」を不可能だと断ずる自己をも同時に有している。また、先に述べた通り、遺書執筆当時には自分自身のことがわからなくなっており、混乱する認識を抱えた状態であることがうかがえる。もちろんこの時の秀吉は〝天才＝狂人〟になりたい、なろうとは思ってなかっただろう。さらに、作品の最後、死の間際の叫びもまた秀吉の混乱する認識の表れだと考えられる。

オレはおろかにも気がふれてバカな戦争を起してしまった。
(…) 鶴松の死でヤケクソを起し朝鮮へ攻めこんで、ために秀頼の関白位もやがてはダメにしてしまうのだろう。虚勢、見栄。オレの至らぬためである。むやみに威勢をみせたがるようなオレの虚勢と見栄が知らず知らずオレをかりたててこの破滅を生んだのだ。

死の間際になって秀吉は、当初自分自身ではそう思っていなかった〝狂人である〟という認識を他者から受容してしまう。しかし「何より分らなくなってしまった」秀吉は、次の瞬間には朝鮮征伐は「気がふれ」た結果ではなく、「ヤケクソ」の結果だと述べる。冒頭における事実〝かも〟という言葉が表すように、秀吉の自身に対する認識は揺れに揺れている。さらに今際の際になっても秀吉の揺れは続く。

その代りいまわの時にはクワッと目をひらいて必ず云うぞ。朝鮮の兵隊たちをたのむぞと。一兵も殺すことなく日本へ帰るようにしてやってくれと。そして神々も照覧あれ秀頼の名は決して云わぬぞ。

本作における秀吉の秀頼への盲愛ぶりを見ていると、本当にそんなことができるのかと疑ってしまうような言葉だ。そして何よりも秀吉の揺れを強く表しているのは、結局最後まで「朝鮮の兵隊」と「秀頼」の名前を出していることだ。「云わぬ」と言われたところで、結局は名前を出すことで最後までどちらともを意識していることがうかがえる。[13]

この秀吉の混乱は、自己認識と他者からの認識の差異に起因していると考えられる。一方では〝天才＝狂人〟というレッテルを自分自身に貼り、また他者から貼られてもいた。つまり自他の認識が一致している状態であった。しかしその一方で、自他の認識が一致しなくなった――自分では自分のことは〝狂人〟でも〝天才〟でもな

いと認識する反面、他者は自分を〝狂人〟だと認識する――時に、他者の目を気にする秀吉は他者からの〝狂人〟という認識と、自己認識――自分は〝狂人〟でも〝天才〟でもなく、極々普通の人間であるという――の差異に混乱をする。その混乱が、秀吉に本作冒頭において自分のことが「何より分らなくなってしまった」と語らせたのではないだろうか。

そして、本作を論じる上で、引用されないことはないほどではあるが、やはり引用をしておきたいと思う。

「秀吉だ。秀吉を書くよ。誰れにも解って貰えなかった秀吉の哀しさと、バカバカしいほどの野心とを書くんだよ」――それが『狂人遺書』であった。[14]

「誰れにも解って貰えなかった」「哀しさ」とは、〝天才＝狂人〟であると見せていたし見られていた秀吉が、実際には〝天才＝狂人〟ではなかったことを解って貰えなかった哀しさだったのかもしれない。あるいは、このように言った方がいいのかもしれない。〝天才＝狂人〟という認識から零れ落ちた、それ以外の自分の存在があることを解って貰えなかった哀しさだったのかもしれない、と。そして、このことが、冒頭で秀吉が語る「ただ一ツ、何よりも分りすぎて苦しんでいること」でもあるのではないだろうか。一方では自他共に認める〝天才＝狂人〟であり、そうあるための振る舞いをしてきた。しかし、一方ではそう振る舞ってきた自分を見つめるもう一人の自分――〝狂人〟でも〝天才〟でもないごく普通の自分――が同時に存在していた。だが、その自分は結局他者から認識されることはなく、〝天才＝狂人〟を見栄と虚勢で演じる自己に殺されたまま肉体ごと死んでいく。つまり「ただ一ツ」とは、〝天才＝狂人〟であるとレッテルを貼った自他によって、恐らくは本来の自己であったであろうごく普通の――それこそ子どもを愛しているだけのごく普通の父親である――自分が存在しないものとされたこと、ではないだろうか。そして殺され存在しないとされた自己が存在していたことが、分りすぎることによって、苦しんでいる。その苦しみを吐き出すための遺書である。そう読むことも可能ではないだろうか。

四　〝狂人〟遺書

本作は秀吉が小田原征伐を終えた直後から秀吉が死ぬ直前までを描いているが、安吾にはそれに先んじて朝鮮征伐後から秀吉が死ぬまでを描いた短編がある。一九四六年九月『社会』創刊号（鎌倉文庫）に発表された「我鬼」である。本作と「我鬼」は書かれた時代やクローズアップされている人物は違えど、『近世日本国民史』などを共通の典拠としているため、同じ描かれ方をしている場面も多い。例を挙げれば、秀次が秀吉を宴に招く場面[15]や、秀次が斎戒沐浴する場面[16]などである。

しかし、当然ながら決定的に違う描かれ方をしている事柄もある。それは秀頼に対する扱いだ。原卓史は「坂口綱男」（『国文学解釈と鑑賞別冊　坂口安吾事典〔事項編〕』至文堂、二〇〇一年九月）の項で次のように述べている。

綱男の誕生は、家や家庭を否定してきた安吾にとって一つの転機となり、親と子との葛藤を描いた「真書太閤記」や「狂人遺書」などを著した。

本論において注目したいことは、秀頼＝綱男ということではない。親が子へ向ける感情を実感として得たため、小説の内容として反映できるようになった、ということである。かつて、子どもが生まれる前には遺書で「お家断絶」[17]とまで書いた安吾である。事実、「我鬼」では「能の嫉妬は憎悪の陰から秀頼の姿を消した」とあり、一瞬でも秀頼のことが秀吉の頭から消えたという記述がみられる。しかし「狂人遺書」ではそんな描写は見られない。秀頼が生まれてからは最初から最後まで秀頼のことが秀吉の頭の中の大部分を占める。そして「秀頼、秀頼、秀頼。豊臣、豊臣、豊臣。」という語りから知ることができるように、秀頼のことだけではなく「豊臣」という家の繁栄にまで思いを馳せることになる。安吾が家の存続や繁栄を願っていたのかどうかはわからないが、少なくともそういう感覚が小説内で徹底されたのは安吾自身の実生活に「転機」が起こったからに違いない。

また、原卓史は「作品の生成過程については、同じモチーフが繰り返されていくけれども、意味づけは作品ごとに異なっている」[18]とも述べている。確かに、「我鬼」と本作とは、似てはいるが、単純に三人称小説である「我鬼」を一人称小説「狂人遺書」にしたというわけではない。既に示したように、少なくとも秀頼に対する扱いに変化がみられることがその証明になろう。では、本作の「意味づけ」はどのようになるのか。この「意味づけ」をするためにも、本作のタイトル「狂人遺書」に立ち返りたい。

本作のタイトルについて原卓史は次のようにも述べる。

これ〔「狂人遺書」というタイトル―引用者註〕を付けたのは、タイトルの下に署名されている「坂口安吾」であることは言うまでもない。秀吉自身は正気か狂気か判断できずにいるのに対して、「坂口安吾」は秀吉を「狂人」とみなしているのである。秀吉の自分評と「坂口安吾」の秀吉評との違いこそが、本来ならば知り得ない情報を語る秀吉の人物像を解く鍵なのである。[19]

「狂人遺書」において〝狂人〟という認識を語り手である「オレ」＝秀吉はしない。それに対し、三人称小説である「我鬼」は作中において「耳もきこえず、目も見えず、たつた一つのものだけが残つていた。秀頼。秀頼。秀頼。彼は気違ひだつた」と語り、はっきりと秀吉は〝狂人である〟と断言される。ここで注目しなくてはならないのは秀吉を〝狂人〟と認識するか否かの差であろう。原卓史が述べるように、「狂人遺書」において「「坂口安吾」」は秀吉を〝狂人〟と認識する。しかし実際、描かれる秀吉はごく普通の人間として読むこともできる。〝狂人〟であると見なした者達によって存在しないものとされた、もう一人の秀吉の苦しみと、叫びが描かれた作品であると読むことも可能である。本作と「我鬼」との間に横たわっているのは、作家安吾自身の視線の相対化ではないだろうか。以前、「我鬼」において〝狂人〟と断言した秀吉を、本作では狂人として描かない。しかしタイトルにおいて〝狂人〟であると宣言す

る。そこには明らかな隔たりが生じる。そしてこのように実際の描写と、作家安吾自身が〝狂人〟と断じてしまうこととの隔たりによって、以前秀吉を〝狂人〟として見た自分の視線を批判しているとはとれないだろうか。自分は以前彼を〝狂人である〟と判断した。しかし実際のところ、彼は〝狂人〟ではなかった。以前の自分は、秀吉を〝狂人である〟と断ずることによって〝狂人ではない〟秀吉を殺していた。以前の自分の視線は、今の時点から見ると批判されるべきものである、と。

おわりに

安吾作品にジャンルや時代を超えて通底するものがあるのだろうか――安吾作品を読みながら、論じながら、それを考える。そのことを考えた時に、本作は処女作である「木枯の酒倉から」やそこにつけられた「附記」とつながるものがあるのではないか、と考えることができる。以前、拙論において「木枯の酒倉から」で描かれていたのは、サティが「明日の音楽」を求め続けたように、自分も「明日の」小説を求め続ける。しかし、その時に「自分の事を監視する、もう一人の自己」が必要になる。つまり「永遠に創作し続けながら疑い続ける」という創作態度ではないかと論じた[20]。

そして本作も、「木枯の酒倉から」と同様の創作態度を表した作品として読むことができるのではないだろうか。秀吉という以前と「同じモチーフ」を扱うが、それに対する「意味づけ」は異なる。その中で以前扱ったモチーフに対して、新たな批判を加える。決して昨日と同じ音楽を作ろうとしなかったサティのように、今日の作品は違うだろうか。「明日の」作品は違うだろうか、と。タイトルの「狂人遺書」に込められていた以前秀吉を〝狂人〟として見た自分の視線への批判は、このような処女作から続く安吾の自分自身を見つめる視線の表れだったのではないだろうか。処女作で安吾が、この小説は「永遠に續くべきものの一節」と言ったように、「狂人遺書」も安吾が最初から持ち続けた創作態度を貫いた「一節」だったと読むこともできよう。

また、本作には「木枯の酒倉から」との共通点がもう一点あるようにも思える。それは区別の無さだ。「木枯の酒倉から」ではヨーギンと狂人の論は、一見すると違うことを言いながら根底は同じであった[21]。本作では秀吉が抱える〝天才＝狂人〟という紙一重が区別の無さに通じるものになろう。あるいは、狂人でも天才でもない普通の人間であるという秀吉の側面や、秀吉の他者に対する認識の二面性もまた、区別の無さに通じる。正反対に見えて実は同じ、相対するように見えて実は同じ。安吾は双方の作品で、登場人物たちにそのような二面性を背負わせている。この共通点は一体、何を意味しているのだろうか。ただ、徹頭徹尾人間に興味を持ち、人間を描きたくて人間を描き続けてきた安吾の目に映る人間の興味深さは、そこに集約されているのかもしれない。正反対を同一の肉体に宿す人間をどのように描くか。それは「永遠に續く」中での安吾の一つの大きなモチーフだったのかもしれない。

注

1　神西清、中村眞一郎「小説診断書」(『文芸時評体系　昭和篇Ⅱ　第十巻 昭和三十年』ゆまに書房、二〇〇八年一〇月。初出は『文学界』一九五五年二月)において、神西は「ところが秀吉に作者が轉化したんならいいけれども、逆に秀吉を作者のほうへ轉化させているという妙な結果になつていると思う。」と、安吾と秀吉の一致を見ている。

2　菊田均

3　例えば奥野健男「解説」(『定本坂口安吾全集』第六巻　冬樹社、一九七〇年二月)には「この「狂人遺書」という作品は、安吾に子供ができたという体験によってはじめて書くことができた傑作」と評し、続けて「「ソレ！小便だ！」の大音声、これを書いているとき、安吾は二歳の我が子綱男が小便をたれたことを思っていただろう」と述べている。

4　例えば平野謙は「文芸時評（上）」(河出書房新社、一九六九年八月。ただし発表は一九三〇年一月)で「太平洋戦争勃発当時のことを思いうかべながら、読んだ」と、当時の人間として太平洋戦争が想起されることを指摘している。他にも菊田均は『国文学解釈と鑑賞別冊　坂口安吾事典〔作品編〕』(前掲)で「この作品に安吾の戦争体験が繁栄されているという意見は平野以外にも多い。安吾の歴史小説は、なにほどか自身を反映している、という見方はほぼ定着している」と述べている。

5　安吾自身も「処女作前後の思ひ出」(『早稲田文学』一九四六年三月)で「山路愛山の徳川家康に感心したが、愛山とか徳富蘇峰とか、かういふ独創的な歴史家の歴史を読むと、私はそれに限定され、それ以上にハミ出すことができなくなつて、歴史小説が書けなくなつてしまう」と述べている。

6　典拠やその比較に関しては、原卓史『坂口安吾　歴史を探偵すること』(双文社出版、二〇一三年五月)を主に参考にした。

7　「しかるに、その鶴松が三ツの正月に病気になって死んだ。掌中の珠を失ったオレは同時に生涯の上昇を終えて下降をはじめたのであった」と、鶴松の死が契機であったことは本作中で述べられている。

8　「威勢がよすぎたせいで、オレはそのころから、日本平定の次は朝鮮、朝鮮の次は大明征服などと思わぬことを口走るようになってしまった。(…)けれども対等の貿易が不可能な場合、オレの武力に物を云わせて有利な條件にみちびいてやってもよいというぐらいのウヌボレと空想を次第にハッキリ持つようになっていたのは事実であった。」(「狂人遺書」)

9　『近世日本国民史』には「其の初期、中期の周到なる注意が、幾許か放慢となって来た。此れが其の一大病根であった。」とある。

10　秀次という人物に対する安吾の興味というものもいささか気になる部分がある。「我鬼」における秀次の描かれ方はある意味、本作の秀吉よりもわかりやすく〝狂人〟だ。人体の解剖に興味を持ち、妊婦の腹を裂いたり、盲人が切られうろたえる様――これには典拠が存在しているが――を見て陰鬱な心を慰める。本作でも秀次は秀吉に「石」となり「風」となり影響を与えていく。安吾にとって「我鬼」から続く秀次の描き方には何かがあるようにも思われる。

11　原卓史『坂口安吾　歴史を探偵すること』(双文社出版、二〇一三年五月)

12　「エライ狂人の話」(『明日は天気になれ』『西日本新聞』一九五三年一月二三日)

13　ちなみに、「我鬼」での秀吉は「朝鮮の兵隊」のことを頼みながら死んでいく。文献でも秀吉の最期は子のことを頼んでいるものと、朝鮮の兵を頼んでいるものとに分かれ、実際にどちらだったのかは判然としない。そして本作において安吾は〝どちらでもない〟ことを選んだのだろう。

14　笹原金次郎「桐生の一夜」(『坂口安吾選集第二巻』創元社、一九五六年八月)

15　一例として、「我鬼」「狂人遺書」『近世日本国民史』における同一場面を引用しておく。

「「殺さなければ、殺されますよ」

(…)

「殺さなければ、殺されない」

これが奴めの言葉だ。祈りだ。こう祈りたいのが奴めのオレに対する本心、本性というものなのだ。

奴めが関白になって公式にオレを招待する宴がのびのびになっていた。

さてこの宴をやることになつたから、世上では奴がオレを殺す宴だというように噂していた。オレが當日になるたび二度三度今日は行けないと断りを云わせて宴をすッぽかしてやつたから、世間はオレが奴めの裏をかいたと解したが、ま、そういう意味もあったことは事実だ。二度三度とすっぽかしたあげく宴によばれてやつたが、部屋々々にはオレの軍兵がギッシリつめてるという変った宴で、オレは數日滞在したが、奴めは異心なきアカシをたててみせるため、自身台所に立つて食物の指図までして寝不足で目をあかくしているような奮闘ぶりであった。」（「狂人遺書」）

「彼が関白の格式で公式に太閤を招待する饗宴がまだ延び延びになつてゐた。そしてやうやく定められた饗宴の当日に使者がきて、訪問中止を伝へた。世上では秀次が秀吉を殺さなければ、秀吉が秀次を殺すであらうと噂され、秀次の計画が裏をかゝれたのだと取沙汰した。然し世上の流説は秀次の身辺ではさらに激烈な事実であつた。彼の侍臣は常に彼にさゝやいた。殺さなければ、殺される。（…）彼は侍臣のささやきに、また世上の流説にとりまかれ、然し、ひそかに、殺さなければ殺されないと必死に希つてくゐるのであつた。

（…）秀吉の数日の滞在を慰めるための催しも、饗宴の食物も、彼は一々指図した。彼は心をこめていた。熱中した。（…）

秀吉は饗宴に応じ、連日のもてなしに満足したが、異変にそなへて部屋々々には武器をかくした秀吉の軍兵たちがつめていた。」（「我鬼」）

「一五九五年―文禄四年―秀吉は、秀次の心を安ず可く、所謂る譲国の大典とも云ふ可き儀式行ふ可く、秀次の聚楽の第に臨む旨を申し送り、その為め秀次は、一万三千の膳を用意したが、秀吉は寵臣の諫によりて、之を中止し、秀次も、其の侮辱の為めに憤懣したが、其の原因秀吉の疑惑に在るを確め、百方異心なきを示したから、秀吉は北政所と與に、之に赴いた。（…）而して秀吉は三日間聚楽第に在つたが、然も恒に快心する所ありて、中心毫も愉快の情がなかつたとは、フロエーの記す所であつた。而して世間でも、頗る物騒に感じ、秀吉の身上を氣遣ふ者も少からずあつたと云ふことだ。」（『近世日本国民史』）

16「皆の者、これを讀め。秀次は斎戒沐浴白衣をまとうて怖ろしい神下しをしてこの誓紙を書いたげな。笑うべきは世上の浮説だ。血は水よりも濃し。口さがない百萬人がどう云おうとも、この秀吉は秀次の心底見とどけた。その方らもこれを鑑に世の浮説を信じてはならぬぞ」（「狂人遺書」）

「彼は誓紙を侍臣に示して、関白の忠義のまごゝろは見とゞけた。これを見よ、世上の浮説は笑ふべきかな。血は水よりも濃し。まして誠意誠実の関白に異心のあらう筈はない。口さがない百万人の人の言葉はどうあらうとも、一人の肉身の心の中は信じなければならぬものよ。そなたらもこれを今後の鑑にせよ」（「我鬼」）

17『東京人　8月号』（教育出版株式会社、一九九五年七月）に掲載された「遺言状」には「尚、養子は貰うな。家名断絶せよ。」とある。

18（11）に同じ

19（11）に同じ

20 拙論「坂口安吾「木枯の酒倉から」論――サティ、ドビュッシーとの関係を中心に」（『成蹊国文』第四十九号　二〇一六年三月）

21（20）に同じ

参考文献

徳富蘇峰『近世日本国民史　朝鮮役（上～下）』（丙～己篇）民友社、一九二二年

三浦理編『太閤記』下　有朋堂書店、一九二二年一一月

中村孝也校訂『帝国文庫（第十四巻）眞書太閤記』下巻　博文館、一九三〇年一月

徳富蘇峰『近世日本国民史　豊臣秀吉（一～四）』講談社、一九八一年八月～一一月（底本：時事通信社刊行本、一九六〇年―一九七一年）

山路愛山『徳川家康（下）』岩波書店、一九八八年四月（底本：『徳川家康』独立評論社、一九二五年）

山路愛山『豊臣秀吉（上）』岩波書店、一九九六年二月（底本：『豊太閤』前編　文泉堂書房・服部書店刊、一九〇九年二月第六版。一版は一九〇

八年一一月）

山路愛山『豊臣秀吉（下）』岩波書店、一九九六年三月（底本：『豊太閤』後編　文泉堂書房・服部書店刊、一九〇九年四月）

坂口安吾作品の引用は全て『決定版　坂口安吾全集』（筑摩書房、一九九五年五月～二〇一二年一二月）に拠った。

（きしもと・りさ　大学院博士後期課程在学）